

## 修士論文概要

# 「が」と「は」の使いわけとその理由 母語話者と非母語話者の実態調査を比較して

ベロニカ・トドロバ・ゲオルギエバ

2008年9月

「が」・「は」については、その使い分けの原理、習得を論じる先行研究は多い。現在のところ、非母語話者（下記、NNS）による「が」・「は」の習得に関して明らかになっていることは、レベルまたは母語などにかかわらず「は」は「が」より先に習得が進むこと（八木 1998）、機能別に習得状況をみると、主題の「は」、目的語の「が」、対象の「が」は正用順序が高いが主語の「が」と対照の「は」は正用順序が低いこと（小森早・坂野 1988、八木 1996、富田 1997、坂本 1998）の2点である。

しかしながら、助詞「は」による主題の概念が先に習得されるように見えるものの、NNSが、主題化された主語には「は」をつけ、主題化されていない主語に「は」をつけないという規則を果たして習得しているかどうか疑わしく、検討する必要があることも指摘されている（森本 1998、八木 2000）。

また、「が」・「は」の使用に関しては、日本語母語話者（下記、JNS）の間でも揺れがみられることが、先行研究で指摘されている（長友 1992）。そこで、その点をより深く追求し、「が」・「は」の使い分けを研究する必要があると思われる。

以上を踏まえて、本研究では、JNS と NNS による「が」・「は」の使い分けについてそれぞれ次のことを明らかにする。

### JNS について

- 1) 「が」・「は」は択一的に選択されるものなのか。
- 2) JNS 間で「が」・「は」の使用に相違が観察されるのか。そして、その原因は何か。
- 3) 調査方法が異なると、得られる結果に違いが生じるのか。

### NNS について

- 1) 上級レベル以上の NNS にみられる「が」・「は」の使用と JNS の「が」・「は」の使用とにはどのような類似点、相違点があるのか。

- 2) 「が」・「は」の使用に JNS と NNS の間に相違が観察されるのか。また、その原因は何か。
- 3) 調査方法が異なると、得られる結果に違いが生じるのか。

以上のリサーチクエスチョンを検証するために次のような調査を行った。1 つは発話調査、もう 1 つは穴埋め式調査である。この 2 つの調査を通して、JNS と上級以上の NNS による「が」・「は」の使用状況を調べた。

調査の被験者は日本語母語話者 (JNS)、中国語母語話者 (NNSC)、韓国語母語話者 (NNSK)、ブルガリア母語話者 (NNSB)、各 10 名、合計 40 名である。NNS の日本語能力は上級以上である。

まず、発話調査においては“**Frog, where are you?**”という文字のない絵本を用い、被験者に自由に物語を作り語ってもらった。発話調査終了後すぐに、同じ絵本を用いた穴埋め式調査を行った。穴埋め式調査では、被験者に助詞を入れてもらいながら、その助詞を選択した理由を説明してもらった。穴埋め式調査は、“**Frog, where are you?**”に筆者が作成した文章を入れたものである。

穴埋め式調査は、63 の項目からなり、そのうち本調査の「が」・「は」の項目は 46 項目、そして「が」・「は」以外の助詞を入れるダミーの項目は 17 項目である。両者の調査には、一人あたり約 1 時間をかけた。また、全発話を録画、文字化して、JNS と NNS の「が」・「は」の使用状況を明らかにするための資料とした。

その結果、明らかになったことをリサーチクエスチョンの順にまとめると、次の通りになる。

#### JNS について

- 1) 「が」・「は」は択一的に選択されるものなのか。

本調査の全 46 項目のうち、「は」のみが用いられたのは 18 項目、「が」のみが用いられたのは 10 項目、いずれの助詞も用いられたのは 18 項目であった。いずれもの助詞も用いられた 18 項目のうち、一方の助詞の使用が 30%以上の JNS によって認められていながら、他方の助詞も 30%以上の JNS によって認められている項目は 10 項目であり、一方の助詞が 30%以上の JNS に認められているが、他方の助詞は 30%以下の JNS にのみ認められているのは 8 項目である。ここから、「が」・「は」の選択は択一的に選択されているとは限らないことが検証された。

2) JNS 間で「が」・「は」の使用に相違が観察されるのか。そして、その原因は何か。

22 項目を取り上げて考察した。JNS 間で「が」・「は」の使用に相違が観察され、その原因が大きく 2 つに分けられることが分かった。1 つは、その文が想起される事態の解釈が JNS によって異なるため、助詞の使用に相違がみられたというものである。このような相違は 1 つの項目のみで観察され、被験者は登場人物を初登場として扱うか、当然想定されるものとして旧情報として扱うかが、JNS によって解釈が分かれた。そのため、「が」を記入した者も、「は」を記入した者も現われたのである。

もう 1 つの原因は、その文の機能の解釈が分かれたというものである。その文自体が文脈によって 2 つ以上の助詞の使用を許したとしても、被験者がそのような文脈の存在に気付くか、または気付いても認めるかによって、JNS の回答が異なったのである。

複数の文脈解釈が成立可能となったのは、談話に依存した機能が働く場合と、対比と排他の機能が働く場合である。

3) 調査方法が異なると、得られる結果に違いが生じるのか。

JNS の穴埋め式調査で、回答に異なりがみられた項目をみたところ、調査方法によって 9% の回答に違いが生じていた。一方、穴埋め式調査で JNS 全員が同じ助詞を記入した項目においては、調査方法によって結果に違いが生じた項目はなかった。

同一の被験者にもかかわらず、同一の文脈に異なる助詞が用いた例があったということは、次のように説明できる。つまり、両方の助詞が使用可能な文脈では、文脈を異なった見方で解釈することも可能であり、調査方法に合わせて文脈の解釈を変え、それによって異なる助詞を用いたという結果になったのである。しかし、一方の助詞のみが使用可能な文脈では、調査方法による違いはみられなかった。

NNS について

1) 上級レベル以上の NNS にみられる「が」・「は」の使用と JNS の「が」・「は」の使用とはどのような類似点、相違点があるのか。

助詞の回答に関して、最も大きな相違は、複数回答を認める JNS と NNS の割合である。JNS では複数回答がある 18 項目において複数回答が平均 27%、最小 10%、最大 70% の割合で観察された。その一方、NNS では複数回答があるのは 31 項目で、最小 3%、最大 10%、平均 6% の割合にとどまっている。

JNS の調査によって「が」・「は」の選択が択一選択でないことが検証されたため、「が」にする、「は」にするという選択は、伝えたい文脈によって使い分けられていることが確認

できた。つまり、NNSにとって、JNSのように自分の文脈の解釈に適した助詞の選択ができるようになることが非常に重要であると言えるだろう。しかし、文脈の解釈の助けによる助詞の選択は、上級以上のNNSにもまだ習得されていないという結果となった。本研究の結果から、NNSは択一的に「が」・「は」の選択を捉えていることが明らかになったのである。これは、NNSが内在化する規則がJNSの日本語の体系と異なっていることの表れと言えるだろう。

2) 「が」・「は」の使用にJNSとNNSの間に相違が観察されるのか。また、その原因は何か。

JNSとNNSの間に回答に相違があった原因は、NNSが、JNSの日本語の体系とは異なる規則を内在化していることにある。内在化している規則の異なりは、2つに分けられる。

1つ目は、NNSが助詞の果たす機能として捉えているものが、JNSのそれとは異なっているというものである。

2つ目は、NNSがJNSにみられない理由で助詞を記入しているというものである。取り上げた11項目においては、この種の相違が最小13%、最大90%という幅のある相違として平均44%で観察されている。特に、そのうち、言語要素を手がかりにし、助詞を選択しているものが60%を占めている。

本研究では、表層的にJNSと同じ助詞を用いても、内在化された規則がJNSの日本語の体系とは異なる場合があり、表層的に用いられた助詞が一致していても、NNSに助詞の機能と使い分けが正確に習得されているとは言えないことを明らかにした。つまり、NNSの「が」・「は」の使用を表層的にだけみて、それによって主題、無題の習得状況を判断することはできないのである。

3) 調査方法が異なると、得られる結果に違いが生じるのか。

穴埋め式調査の結果と発話調査の結果とを比較すると、NNSの場合も、調査方法によって違いが生じることが明らかになった。穴埋め式調査と同じ助詞を用いたNNSは81%であり、異なる助詞を用いたのは19%である。

穴埋め式調査で回答が一致した項目において、発話調査と高い一致性がみられ、異なる助詞を用いているNNSは13%であった。その一方、穴埋め式調査で回答が揺れている項目では発話調査で穴埋め式調査と異なる助詞を用いたのは40%という高い割合にまで至っている。

これは、JNSの結果と異なっている。JNSで調査方法によって異なる助詞が用いられた項目における、その異なりの割合は平均9%であった。しかし、それは揺れている項目においてのみである。

日本語教育との関わりについて言えば、日本語学習者に母語話者の表層的な「が」・「は」の選択を提示し、「が」・「は」のいずれを用いれば、正解になると教えるのでは「が」・「は」の習得は進まない。今後、無題と主題の概念の習得を促すような指導法の提案を課題としていきたい。日本語学習者にとって、絶対的に「が」あるいは「は」のどちらかしか使用可能でない場合はどのような場合なのか、伝えたいことによって助詞を使い分けられる場合とはどのような場合で、自分の文脈の解釈にはどの助詞を選択すべきなのかを習得することは、非常に重要なことである。

#### 参考文献

- 小森早江子・坂野永理（1988）「集団テストによる初級文法の習得について」『日本語教育』65号，日本語教育学会，126-128.
- 坂本正（1998）「助詞「は」と「が」の習得について－文法性判断テストを通して－」『アカデミア 文学・語学編』第64号（通巻第239集），南山大学，491-508.
- 富田英夫（1997）「L2日本語学習者における「は」と「が」の習得－キューの対立が引起こす難しさ－」『世界の日本語教育』第7号，国際交流基金日本語国際センター，157-174.
- 長友和彦（1992）「「が」・「は」運用の可変性(variability)と系統性(systematicity)」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第45巻，お茶の水女子大学，237-250.
- 森本順子（1998）「助詞「は」と「が」の習得過程－オーストラリア日本語学習者の作文から－」『京都教育大学紀要 人文・社会』A第93号，京都教育大学，113-128.
- 八木公子（1996）「初級学習者の作文にみられる日本語の助詞の正用順序－助詞別、助詞の機能別、機能グループ別に－」『世界の日本語教育』第6号，国際交流基金日本語国際センター，65-81.
- 八木公子（1998）「中間言語における主題の普遍的卓越－「は」と「が」の習得研究からの考察－」『第二言語としての日本語の習得研究』2号，第二言語習得研究会，57-67.
- 八木公子（2000）「「は」と「が」の習得－初級学習者の作文とフォローアップインタビューの分析から－」『世界の日本語教育』第10号，国際交流基金日本語国際センター，91-107.